
こいひめ + ものがたり

泰兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こいひめ十ものがたり

【Zコード】

Z7076F

【作者名】

泰鬼

【あらすじ】

恋姫十無双の一次創作。北郷一刀とその周りで起きた、とある出来事。出来るなら、ゲームあるいはアニメを見てからの方が良いかもしれません。

せつめつのじと（前書き）

こんなのが書いてみました。別場所にてほぼ同様のものを書いてますが、それにはいかが加筆修正をしたもののです。

北郷一刀は疲れていた。

つい先日戦を終えたばかりなため、太守としての仕事が山程に溜まつているのだ。

戦死した兵士の家族への慰問に欠けた軍備の補強、拡大した領地の引継ぎ等々、すべき戦後処理に追われ、まともに休憩すら取れない状態にある。

机の上に詰まれた書簡は、椅子に座れば隠れられる程の量。それなりに数をこなしてきたとはいえ、やはり一高校生であつた彼には厳しい作業であることには変わりはない。

加えて、いつもなら隣で手伝ってくれるはずの軍師兼補佐的役割を担う諸葛亮孔明こと朱里だが、彼女もまた大量の仕事に追われているため、手伝うどころではない。

それは朱里に限らず、他の將軍も同様なため、一刀はこれらを全て自力でやらなければならなかつた。

「……しかし、流石に辛くなってきたな」

手をだらしなく垂らし、背凭れに寄り掛かりながら小さく呟いた。朝起きてからといつもの、書簡以外まともに向き合つたのは朝食ぐらいだ。

いい加減日も疲れてきたし、お尻も痛い。このままじやあ痔が出来そうだ。下ばかり見ていたせいか、首も辛い。

そして、これを言えば皆に悪いのは分かつていて、分かつてているのだけれど。

正直、飽きた。

似たような作業をただ黙々と行なうのは、一刀には些かむいてはない。それは彼自身も自覚していることであり、責任感や義務感が彼を机に向わせている。

目の前に人参をぶら下げる、若しくは尻を鞭で叩かれれば、間

違いなくより積極的に取り組むだろう。前者であれば、確実に。ただ、今の彼の目の前にそのような物はない。あるのは、高く詰まれたのみ。

と、何を思ったのか、「よし、決めた」と言い、一刀は大きく立ち上がった。その衝撃で、机の上の書簡が少し揺れる。

しかし、一刀は気になった様子もなく椅子から離れ歩き出した。

部屋に一人、溜まったフラストレーション、暫くは誰も来ない。そんなことをボソボソと喋りながら、更に歩みを進める。一刀が足を止めたのは、彼の寝床の一歩手前。視線は寝床 자체ではなく、それより手前のベッドと床の間にある小さな隙間。部屋に誰も居ないのは分かっているのだが、不安なためか周囲を用心深く見回す。確認を終えると、スッと膝を折り曲げさつき見ていた隙間に腕を深くまで突っ込んだ。

すると。

渾名に恥じぬ、やらしい笑みを浮かべた。

まじめつのJET（後書き）

ども、泰兎です。

三国時代についてほぼ知識がないので、所々間違つたことが書かれ
るかもしれません。

その時は、どうせやひつて流しておき。歴史とかホントダメなん
で。

それがお決まり

北郷一刀は浮かれていた。

「いやー、たまにはこいつやつて一人で出歩くのも良いよなあ」
思わずこぼれる独り言。

その言葉通り、北郷軍の総大将にして太守である北郷一刀は町中を一人歩いている。

普段であれば必ず護衛が付いて回り、一刀だけということはまずありえない。彼の地位からすればそれは当然のことだが、そう付き纏われたら落ち着いて町を見れないだろ、というのが彼の想いである。尤も、仕事中なので抜け出そうとする時点で怒られるのだが。そして更に。

「おうつ、兄ちゃん。饅頭、どうだー!？」

「じゃあ一つ頬むよ」

町の人たちは彼を尊称で呼ぶでも、敬語を使うでもなく、ただの少年として接している。

本人は全く気にしないだろうが、商人側にしても、いつもいる護衛側にしても領地を治める太守相手に、そのような口振りで話せるはずがない。

にも関わらずそうしているのは、今の一刀の格好にある。

服は町民と同じ一般的な物。髪型もいつもと違い、油のよくなもので後ろに流している。

それぞれの入手先を聞けば、一刀は「蛇の道は蛇」と格好つけて言うだろうが、実際はその辺の店で買ったにすぎない。

このような格好をしているのは、太守としてではなく、あくまでも町の人間として普通に接して欲しいからだ。

町にいる衛兵や休暇中の将軍たちにバレないためでは、決してない。仕事から抜け出せた解放感からか、町中をどうどうと闊歩する一刀。変装にバレないという自身もあるらしく、表情もどこかユルい。

あー、久しぶりにのんびり出来るな。見回りの兵も気付いてないみたいだし、これなら少しの間はこうしていても大丈夫そうだ。

そう考えていた一刀だが、

「おや主。このよつたな場所で何をしておられるのだ？」

早速バレた。

突然かけられた声に体を竦ませ、恐る恐る振り返る。

そこに居たのは、昇り龍を称する突貫娘の趙子龍だった。因みに、真名は星。

右手には大事そつに小壺を抱えてるのだが、中身については言つまでもない。

「これまた、珍妙な格好を」

「珍妙って……」

確かに一刀の普段着を考えれば、今の格好は珍妙と言えなくもない。見慣れない人からすれば、彼の普段着である制服の方が珍妙であるが。

「髪型まで変えておられるが、それは何かの遊びですかな？」

言葉こそ不思議がつてはいるものの、星は察しのよい少女だ。確實に一刀の行動理由に勘付いているだろう。事実、口が笑っている。一刀がそれを指摘すると、星は大して気にした様子もなく「これは失敬」と謝った。

「それにしても星、良く俺だつて分かつたな」

割と上手く変装したつもりなんだけど、と言葉を継ぐ。自分の服装を見回しながら言つ一刀に、星はニヤリと笑つた。

「何を仰るか主よ。その程度の変装でこの趙子龍を謀るつとは、まだまだ甘い」

「この程度つて、お前が言つか……」

そう言おうと思つたのだが、口には出さず留めておいた。蝶で顔を隠すよりはよっぽど変装してると思つぞ、とも。

「それこそ、あの華蝶仮面のよつに見事な変装でなければ」だから何でそれがバレなくて、これがバレるんだよ。絶対におかし

いだろ。と思つたが、これもまた一刀は言わずにそのまま飲み込んだ。

これもやつぱりお決まり

愛紗は怒っていた。

いや、怒り狂つてと言つべきか。

名を関羽、字は雲長。真名を愛紗といつ。凜としたはずの顔付きは般若の様で、後ろで一つに結つた艶やかな黒髪は蛇の如く蠢いて見える。そして相棒と呼べるそれ、青龍偃月刀を凶器として片手で強く握り締め、地鳴りすら聞こえて来そな程の重々しい足取りで進む。

その姿は、ギリシア神話に登場するメテウーサに近い。

何が愛紗をそこまで怒らせているのか。それはいつも如く、彼女の主が原因である。

一刀が部屋を抜け出した数分後、その近くをうろつく少女がいた。もちろん愛紗だ。

彼女は自身が受け持つ部隊の訓練を終え、漸く一段落したところだ。そして、ふと思つた。今日はまだご主人様の顔を見ていない、と。共に忙しい時であれば仕方なく、夕方になつて何とか話せた、といふことも幾度かあつた。その時は夜にまた、別の用件で部屋を訪れたりもしたが。

ともかく、愛慕する一刀の顔を見ずに一日を終えるなど、愛紗にとってはあつてはならないことだ。それを指摘すれば、一刀曰く、ツンデレである。愛紗は意地を張つてそのまま自室に戻り、自口嫌悪で身悶えるだろう。

今回はそれをする人物がいないため、素直とは言い難いが主の部屋へと向つていた。偶々暇が出来たから、ご主人様が急けていないか見に、そう自分に言い聞かせて。

そして部屋の前まで来たは良いのだが、入るのを憚つてしまつ。仮に入れたとしても、「どうした?」なんて聞かれたら答えられずそのまま帰つてしまいそうだ。考えていた言い訳すらも思いつかず

に。

迷った挙句、愛紗は一つの結論に達した。

「『』主人様に昼食持つて行こう」と。一度昼時であるし、朝からずっと働いておられる。恐らくはお茶すらも飲んでいないのではないか。

そこからの行動は早かつた。厨房へ向い、中華鍋を振るう。込めた気迫は鬼人の如く、込めた愛情は聖母の如く。

そして出来上がった『何か』を皿に盛り、その『何か』を持って厨房を出た。

因みに、厭くまでも因みにであるが、愛紗の使つた中華鍋はその後直ぐに捨てられた。理由としては、用具として機能しなくなつたから。そしてまた、事件発生時厨房にいた料理人數名が、謎の吐き気の眩暈に襲われたことを記しておく。

閑話休題。

『何か』が乗つた皿を両手でしつかりと持ち、嬉々として一刀の部屋へと向つ愛紗。その道すがら、彼女の知らぬところで色々と起きたのだが、割愛。

部屋を訪れる口実と、彼女の言つところの『自信作』を喜んで貰える一つか一邊に出来たのだ、嬉しくもなる。

「『』主人様、昼食をお持ちしました」

部屋の前に到着した愛紗は単純に、しかし多くの想いを含ませた一言。

普段の彼女であれば、気付いただろう。しかし、今の彼女はかなり気が緩んでいる。そのため、中の異変に気付かなかつた。部屋の向うから感じられるはずの気配がないことに。

返事がない事に首を傾げながら、皿を片手で支え戸に手をやる。開けた扉の先に待つっていたのは、彼女を気遣う優しい声でも、彼女が慕う主の姿でもなかつた。

そこにはあつたのは、高く積み上げられた書簡のみ。聰い愛紗はそれだけで全てを察した。

「…………、こ主人様あああああーー！」

「」の國大丈夫か？

星は酔っていた。

酒にでも、自分にでもない。華蝶仮面にだ。

「そして華蝶仮面は華麗にして優美、あの神出鬼没さがそれをまた惹きたてて」

一刀で出会つてから、星はかれこれ三十分程喋りっぱなしだ。その間何を話してたかといえば、言わずもがなメンマ、もとい華蝶仮面についてだ。

高潔、可憐、羞花閉月。思いつく限りの美麗文句を垂れ流しては、一刀をげんなりとさせている。

「てか、これじゃあただのナルシストだら……」

星は華蝶仮面であるのは秘密だが、それを知る一刀にとつて華蝶仮面を褒める星はナルシーとしか言い様がない。

「聞いておられるか、主？」

もう良いよ、と言いたかったが、言えずに頷いてしまう一刀。それに満足したのか、大きく頷く星。しかし話すことは止め様とせず、さらに増長し続けた。

（もう五回ぐらい同じこと話してる）

一刀の内心思つた通り、星は既に同じ話を五回している。恐らくはもうすぐ、六周目に入ることだろう。

始めの方こそそれなりに相槌を打つていたものの、もうそんな気も起きず、ただ耳に入つてくる声そのまま外に流すようにした。

そしてとうとう六周目に突入したが、星は一向に話しあげる気配がなかった。いい加減止めてくれ、とこつそり両手を組み祈つてしまふぐらい、一刀は精神的に疲弊している。

その祈りが通じたのか、漸く星は話すのを止めたことになつた。

「星」

唐突に名を呼ばれたので、話しが止めやおら声のした方へと顔を向

けた。

「おや、愛紗ではないか。どうした、警邏か？」

いつもの様に話掛ける星の横で、一刀は大きく息を吐いていた。話が終わつて残念だなんてことは小指の先程も思つていい。安堵感から吐き出した息だ。

その時一刀には、やつて来た愛紗が天使に見えた。自分の立ち位置も、天使の様なものだということを忘れて。

「いや、ご主人様を捜しているのだが、見かけなかつたか？」

ここに来るまでの間で若干落ち着いたのか、愛紗は幾分冷静にそう尋ねた。ただ、危険な雰囲気は携えたままだ。まるで、これから戦にでも行くかのようだ。

そこで一刀は思い出した、自分が政務を抜け出しここに来ていると、ということを。そうするとどうだ。光輝く天使だつた愛紗が一変して、悪魔のように見えてきたではないか。

背中の翼は凶悪に形を変え、光は黒く辺りを闇にして見せた。

一刀はとつさに星の後ろに身を隠した。彼より星の方が小柄なので、当然隠れることなど出来やしない。本人も重々承知しているだろうが、今の一刀なら子供の後ろでも構いやしないだろう。

それを捉えていた愛紗は、星が答えるよりも早く声を上げ彼の服を掴んだ。

「ご主人様、こんな所に居られたのですか！」

掴んだ服を強く引っ張り、自分の方へと引き寄せた。二人の間にいた星に、引き寄せられた一刀が強くぶつかる。それに文句を言う星ではあつたが、どちらもそれどころではないので気付かなかつた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

両腕で顔覆いながら必死に謝る一刀。怒鳴られると身構えて待つも、一向に声が聞こえてこない。

いつの間にか閉じていた目をゆつくりと開き、顔の前にあつた腕も少しずらす。

一腕の隙間から見る愛紗は、瞬きもせずに固まつていた。口は妙に

開いた状態だが、これは声を張り上げようとしていたからだろう。その様子は、一刀に限らず後ろにいた星も怪訝そうに見ていた。

突如止まつた愛紗を見て、電池切れ？などと頭の悪いことを考える一刀だったが、それを口にするよりも早く、愛紗が硬直から戻つた。

「もも、申しわけない。人違いのようでした」

そう言って掘んでいた慌てて離すと、一步間を取るようにして下がつた。

この展開は予想していなかつたのか、愛紗の反応に戸惑う一刀。しかし、こういう時に限つては頭の回りが早いのも彼だ。

「気にしないで下さい」と至つて平静であるかの様に答えてみせた。この様子、もしかしなくても愛紗は俺だと気付いていない？そう一刀は考えるが、その通り愛紗は目の前の男が、目を血眼にして搜していた人物だと気付いていない。そうでなければ愛紗が「申し訳ない」などと言つはずもなく、既に一刀は酷い目に遭つてはいるはずだ。何とか公開処刑は免れた、と胸を撫で下ろした一刀。そして彼はすかさず。

もう一度、星の後ろに隠れた。

愛紗ってヤンキー要員でもあると思つ

愛紗は戸惑つていた。

部屋の中を無闇に歩き回る愛紗。時折立ち止まつてはしゃがみ込み、立ち上がつてはまた歩き出す。一心不乱……というより、寧ろ煩惱からきている氣もするが、ともかくひたすらに歩き回る彼女の様子は、とても異様でしかない。

愛紗は内的状況が外的状況に現れ易い。要するに、思つたことが顔に出るタイプだ。今は顔どころか体全体で表現しているところを見ると、かなり狼狽しているのだろう。

私は一体どうしたというのだ。ご主人様を捜しに行つたというのに、碌に捜さず戻つて来てしまつたではないか。いいや、どうしたなどと自問せずとも分かつてゐる。原因は、あれだ。

昼頃、ご主人様を締め上げる……ではなかつた、政務に戻らせるべく町で捜索をした時。中庭に居られるのでは、とも考へたのだが、最近のご主人様はどうやら城下へ行かれるのがお好きな様で、今回もまたそうであるつと判断した。

どうせなら、私も誘つてくれれば良いのに……。い、いや、そんな場合ではない、早く見つけることが優先なのだつたのだから。

一応ではあるが、中庭の方も回つてみたものの案の定ご主人様は居られなかつた。そうして私は、町へと駆けた。

それから少しして、運よく星を見つけることが出来た。星もよく城下へと出かけているようなので、ご主人様のいそなうな場所を聞けるかと思い私は声を掛けた。

二つ三つ言葉を交わしている横で、素早く動く何か。言つまでもない、このよつなことをするのにはご主人様しかいない。星の陰に隠れているつもりだろうが、体格に差があるのでみ出でている。

私は咄嗟に服の端を掴み、こちらへと手繰り寄せる。そう、ここまでは良かつた。ここから不測であつた。

ご主人様かと思い引き寄せた人は、別人だったのだ。その時の私は、自分でも分かる程に慌てていた。人違いとはいえ、守るべく民に暴力を加えてしまったのだから。

しかし、その人は少しも怒ることなく済ましてくれた。

思わず息をついたのだが、今度はその人の行動に吐いた息も吸い込む程に驚愕した。なぜなら、星のすぐ後ろにいるからだ。

先程も同様な事をしていたが、その時はこの人がご主人様だと思っていた。そうでないならば、星は何故肌が触れ合う程近くに寄らせているのだろうか。

とにかく私は心を落ち着かせ、星の背後に立つその人を誰何しようとあらうことか、その男は星と、趙雲を真名で呼んだでないか。

真名は己が認めた相手のみ呼ぶことが許される、高潔なるもの。認めた相手以外に呼ばれれば、それは侮辱することと同義だ。

ならばこの男は、あの星が真名を呼ばせても良いという程に認めた人物。格好を見た限りでは、普通の町民にしか見えぬのだが、……。不羈と分かりながらも、私は正体の分からぬその男を見つめていた。そして改めて、私はその男のことを問うた。最初に誰何した時とは、別の意味でも気になつたから。

答えたのは男ではなく、星だった。「私の愛する人だ」と。

私は勿論驚いたが、それよりも怒りの方が強かつた。

確かに忠義と愛慕は別物だ。しかし星については、そのどちらもがご主人様に向いているものだと知っている。にも関わらずその言葉、一体どういうつもりなのだろうか。

強く問い合わせてみるも答えは変わらず、話すのは関係の深さを示唆する言葉ばかり。

私は一言言い捨て、その場で踵を返し別の道へ入った。

あんな奴のことなどどうでもよい良い。元々ご主人様を探しに行つたのだ、星を探しに行つた訳ではない。

その後町を見て回つたが、結局ご主人様を見つけることは出来なかつた。

た。

それから自室で仕事をしたのだが、まったく集中が出来ずにいた。原因は言つまでもない、星のことだ。いいや、違う。星のこともあるが、一緒にいた男だ。

今思えばあの男、何なのだろうか。どこか違和感を覚える。星に愛人と言われたあの時の顔。まんざらでも無さそうな表情が妙に頭に入る。確かに悪くない、寧ろ優しそうな良い人物ではあった。しかしこ主人様と比べれば、天と地程の差。ご主人様はどのようにだらしがない表情など……時々するが、あそこまで腑抜けてなどいない。それにあの態度。女の後ろに隠れるなど、男の風上にもおけない奴だ。

だが、気になるのはあの雰囲気。男を見た時のあの感覚。

それはまるで、始めてご主人様と、一刀様と出会った時のような。

懲りないよね、ホント

北郷一刀は叱られていた。

太守であり、北郷軍の総大将である彼が怒られるなど、滅多なことではあるが、今日はまたいつも増してのことだ。

城下での出来事からいくらか経つたが、特に目立った騒動はなく、一刀はいつも通りの毎日過ごしていた。強いてあげるとすれば、星に「主、酒でもいかがか。何、断るですか？ そうですか、ならば変装のことを皆にいや、主。私が悪かった。だから華蝶仮面のことは……」と脅されたことぐらいだが、そんな卑怯な手には屈せず追い返した。

さて、前述した通りそれは先日のことである。今の彼はと言つと。「確かに最近は戦が終わつたばかりで政務も多く大変ですが、その分私や紫苑さんも補佐して」

これもまた前述した通り、怒られていた。

もつとも、叱られる相手が相手なだけに、怒るというよりはお説教と言つ方が良いかもしれない。理論整然と、数学的に順だつて話し説いていく様は、やはりその閨秀さを感じさせる。

普段はあまり強く出ることが出来ない彼女が、淡々と言葉を継いでいく。前回あの忙しさの中抜け出されたのは、流石に苛立つたのかもしれない。

それを聞く一刀は、床で正座という彼にとつてノスタルジーを感じさせる体勢なのだが、この状況下ではそんなことすら思えないだろう。寧ろ、感情的に怒られた方が楽だったかもしれない。
少し前のことになる。

その時彼は、珍しくも政務に勤しんでいた。

机の上には大量の書簡が積まれており、机上いっぱいに埋め尽くしている。唯一開いたスペースといえば、一刀の使う筆記用具の置き場所くらいだらう。

かれこれ数時間はこの状態であり、積まれたそれを減らしてもまた新しいものを持つて来られるのだ。

げんなりとしていた一刀ではあるが、書簡を運びに来た女官の話によると、とりあえずはこの場にあるので全部だと教えられた。とりあえず、という言葉が気になつたが、一先ずはホッとした。これ以上増やされては堪らない、そうなれば確実に缶詰状態は決定になる。

その不安を感じると同時に、一刀は別の事を思いついた。これで全部なら、暫くの間は誰も来ないんじゃないか、と。

そうなれば、やることは一つしかない。

「よし、行こう」

自分しかいな部屋で呟く。そつ、また抜け出し城下へ降りようとしているのだ。

以前と同じところから変装道具を取り出し、襦の上に軽く放る。そして上着のボタンを上から外し、これもまた襦の上に放つた。手早く上下を着替え、フランチエスカの制服を隠す。それから髪型を変えようと鏡の前に立つのですが、一刀はあることを思い出した。

「そういえば、つと……」

再び隠し場所に戻り、手を入れ探る。そして掴んだそれを取り出し鏡の前に戻つた。彼は手に持つそれを見て軽く笑うと、徐に……被つた。

「おー、まるで別人だな」

鏡に写る自分の姿を見て、また笑う。一刀の短かめだつた髪は、突然として結べる程に長くなつた。そう、彼が着けたのはエクステ、というかカツラだ。

今度はどこから手に入れたのか、綺麗な黒色の毛髪。どうやら以前星にあつさりばれたのが案外悔しかつたらしく、考えた末に行き着いた策がこれのようだ。

因みに、服装も前回と微妙に変わつていて。

髪型も少し変えたし、服も違う。これなら見つかっても絶対にバレ

ない。

よしつゝ、と意氣込み鏡から離れる。そして

。

出オチだからです

朱里ははしゃいでいた。

溜まりに溜まつた政務が、存外早く片付いていたからだ。
勿論まだまだ残つてはいるのだが、天才諸葛亮孔明である彼女の頭
の中では既に終わる見込みがついていた。

「これが終わつたら兵糧の残りを再確認して、新しい領地に使者さ
んを送る。その後愛紗さんから送られてきた兵士さんの増強の検討。
あ、城壁が壊れてたから、補修費用の捻出しないと。それから、そ
れから」

そう呟き、残つた仕事を一つ一つ反芻していく。わざわざ口に出さ
ずとも覚えていることではあるが、言葉にすることでそれを改めて
確認しているのだ。

思いつく限り残つた全ての内容を言い終えると、少し音をたて手に
していった書簡を机の上に置いた。握っていた筆も定位位置に戻し、軽
く息を吐く。そしてすぐに「よいしょっ」とまた小さく呟き、椅子
から離れた。

椅子から降りた拍子に、不意に結わいた後ろ髪が揺れる。

彼女にしては珍しく、トレードマークと言つても良い程に馴染んだ
帽子を被つていない。代わりに紐で、その細い髪を後ろで結わいて
ある。

然程長い訳でもないが、今回の様に政務をしていると稀に鬱陶しく
感じてしまうことがあるため、そうしているのだ。

短い尻尾のようなそれを揺らし、机の横に積まれた沢山の書簡を抱
える。彼女が持つには多すぎる量ではあるが、手馴れた様子で歩き
始めた。

朱里の持つた大量の書簡は、全て彼女が印を通し終えた物。後は太
守である北郷一刀に見せ、了承の印を貰うだけ。

もつとも、彼は政治的内容には疎く、更には文字自体があまり読め

ないため、あくまでも必要なのは印のみ。

しかしそれを朱里に言おうものなら、「そんなことありませんっ！」
と息巻いて否定することだらう。

多少ふら付きながらも部屋を出て、一刀の所へと向かう。

仕事ではあるが、やはり愛しの「主人様に会えるのは嬉しい。あわ
よくば、そのまま少し手伝い且つ、休憩と称して そんな妄想を
浮かべてしまつ。

と、妄想のせいで気が緩んだのか、バランスを崩し軽くふら付いて
しまつた。

「はわわっ」

お決まりのセリフを出しながらも、何とか安定を取り戻す。ふーっ、
と大きく息をつく朱里。

再び歩き出そうとしたところで

「はわわっ」

またしても、お決まりのセリフを言つ破田になつた。
何かにぶつかり、その勢いで後ろに倒れてしまつたからだ。当然、
抱えていた多く書簡は散らばつている。

「いたいたた……」

赤くなつた鼻先に手を添え押さえる。ぶつかつた際、書簡が顔に当
たつたようだ。

「あらあ、朱里ちゃんじやなあーいのあ？ごめんなさいねえ」

不意に現れたのは、ピンクの紐パン一つだけを身に付けた変体筋肉
オバケ。筋肉オバケは尻餅を付いた朱里をそつと立たせた。
どうやら、彼女ぶつかつたのはコレだつたらしい。そしてその後ろ
から、別の声が朱里の耳に届いた。

「おや、本當だ。朱里ではないか。このよだな所で何をしている？」
もみあげを三つ編み上に結い上げた筋肉オバケの陰から顔を覗かせ
たのは、星だつた。筋肉オバケに礼を言つた後、書簡を片付けてい
るところだ、と答えた。

言うまでもなく、嘘である。

「これでもし「ご主人様の所に行きます」とでも言えば、間違いなく星も付いて来たであろう。序でに、筋肉おばけも。一瞬の内にそこまで頭が回る辺り、流石策士であろう。

しかし、

「そうか。しかしその量を一人で持つのは大変であろう。どれ、私達も手伝おうか」

「そおねえ、ぶつかつたお詫びもあるし」

二人がこう言い出すとは思わなかつたらしく、思わず「ええつ」と声を上げた。そこまで頭が回らなかつた辺り、流石朱里である。詰めが甘い。

「いい、いえ、大丈夫です。」「これぐらいいつものことですから」どもりこそしたものの、何とか囁まずに答える。本人にしてみては冷静に答えられたと思つてゐるのだが、彼女の前に立つ二人は訝しげな目付きで見てゐる。いや、もうバレてゐるかもしぬれない。

「まあ、朱里がそう言つなら構わないが……」

そう言つて、拾い集めていた書簡を朱里に手渡した。

「ありがとうございます。それでは、まだ政務が残つてますので」軽く頭を下げ、朱里は小走りで二人の横をすり抜けて行く。見送る筋肉おばけは、朱里ちゃんもお大変ねえ、と零した。

「ところでえ、なんで私は名前で書かれなあいのかーしらあ？」
「知らん」

出オチだからです（後書き）

ども、泰兎です。

書き上げてあつたものはここまでになります。元々携帯向けで書いたため、PCから見た方がいれば、その方には一話一話が短く感じるかもしれません。

俺、恋姫、好きー！という方がいましたら、どうかその顔をお教え下さい。知ってる方が存外少ないもので。

因みに、私は孫権こと蓮華が好きだったりします。
ではでは。

衛兵は何してんだ

北郷一刀は淫槃していた。

正確には、その一步手前と言つべきか。

普段であれば「そんな訳あるか！」と言い返すだろうが、今の彼ならば何も言わず両手を合わせてしまつことだろう。

時は戻り現在。

前述の通り、一刀は今にも淫槃しそうにある。但し今度はもう一つの意味も含めてだ。

それはおよそ半刻程引き続いた説教の後、前にも増して積まれた書簡が原因だ。

抜け出そうとした一刀と、彼の部屋を訪れた朱里が運悪く　と言うのは一刀の方だが　　出会つた際の事をもう少し詳しく言つのであれば、こうなる。

さあ行くかと気を入れて、勇み正しい出入り口へと向かう一刀。因みに、正しくない方は窓だ。

この時、入れた気をもう少し周囲に向けていれば、あるいは違つたかもしけれない。

しかし残念ながら、一刀の気持ちは周囲ではなく、既に町へと向っていたのだから、この結果は必然と言えよう。ちょうど同じタイミングで、朱里と鉢合わせるのは。

これが簡単な流れであるが、ただこれだけなら大した問題ではない。小用とでも言えばするのだから。

だが、思い出して欲しい。一刀が変装していたということを。

そうなると話は変わつてくる。どう言ひて訳したところで、通用するはずがない。

そして更に、これこそ重要なのが、朱里が一刀の変装に気付かないという可能性。場合によつては、衛兵を呼ばれ騒ぎが大きくなってしまうかもしれない。

それだけはどうしても避けたい事態だが、なんとかそれは一刀の杞憂で済んだ。

何と言つても、朱里はある華蝶仮面の正体を一目で見破つた、数少ない内の一人なのだから。

そんな明敏である彼女が、一刀の変装を見破られない訳がない。結果、抜け出すことに失敗した一刀は、朱里からのお説教に加え新たに多くの仕事を与えられたのだった。

「あのー、朱里……さん？」

「何でしちゃうかご主人様。どこかわからないところでもありましたか？」

一刀の呼び掛けに、いつもよりそつけなく答える朱里。その雰囲気は、どこか関羽に似たものがある。

「そろそろ休憩なんてどうかなー、なんて思つてみたりするんですが」

遙り、上田使いでおどおどと話しかける主の姿に、仕方ないといつた様子で軽く息を吐き答える。

「それじゃあ、すこしだけですよ？」

ここで首を横に振れない辺りが、彼女の性格だらう。

衛兵は向してんだ（後書き）

ども、泰兎です。

久しぶりの更新。真が出てかなり経つにも関わらず、この話は旧版の恋姫。無理矢理に真に転化させるべきか。
もつとも、そんなに沢山キャラはでませんが。

恋姫に未成年などいません！……一人を除いて。

北郷一刀は和んでいた。

つい先程の状況を鑑みると、えらい違いである。

恐らく本人は「さつきのことなどとうに忘れている」ことだろう。

「いやあ、朱里の淹れたお茶は美味しいな」

はああ、と深く息を吐き、一刀は顔を正面に向ける。

彼の文机の真向かいに鎮座する、簡素な机。言わざもがな、朱里のものだ。

彼女の机の上には、一刀よりも多くの書簡が置かれていたのだが、今は一刀のそれより少ない。

彼女の処理能力は、なんとも恐ろしいものである。

「そ、そんなことありません。月ちゃんたちの方がもつと美味しい淹れられます！」

顔を朱色に染めながら、照れ隠しに主の言葉を否定する。

危うく持っていた湯飲みからお茶が零れそうであつたが、それに彼女が気付くどころではなかつた。

当然、正面から見ていた一刀には見えていたので「零れる零れる」と注意を促すと、朱里は「しゅいません……」に顔を赤くしてしまつた。

「月と詠は本業だからね。二人より上手く淹れられたら、怒られちゃうよ」

そう言つて戯けると、朱里は笑つて頷いてみせた。

本当は「でもやっぱり、今度から朱里に淹れて貰おうかな」と冗談めかして言つつもりだったが、それを言つと本当にし兼ねないので止めることにした。

因みに、月と詠とはメイドの真名である。侍女でなく、メイドというところがミソだ。彼女たちはとある事情から一刀たちが保護することになつたのだが、本名が有名過ぎるため身を隠す意味も含めて、

メイドとして働いて貰うことにしたのだ。

「ところで朱里、今日は帽子被つてないんだね」

「あ、はい。ちょっと髪が鬱陶しかったもので、結んじやつたんです」

「

顔を右に向け、結んだその部分を一刀に見せる。

短いながらも上手に結ばれており、綺麗に揃った生え際が見えている。

纏められた髪が上下にふるふると揺れるのが目に入るが、一刀の目に入っているのはそこではなかった。

「（うなじ……）」

どうやら一刀には、うなじの癖も持ち合わせていたようだ。

そんなことには気付かず、朱里はただ一刀に凝視され照れている。

「えと、やつぱり変……ですか？」

と不安げに聞くが、一刀は朱里が言い終わるよりも早く、

「そんなことない、凄く良い！」

と答えた。若干鼻息が荒いのは、やはりか。

その言葉に思わず両手を頬に宛行い、赤くなつた顔を隠す。

その仕草は彼女の年齢から考えると幼く思えるのだが、見た目のせいかそれ相応で、寧ろ可愛さを感じさせてしまう。

「あ、あのを朱里……」

「……はい」

一刀の呼び掛けに、朱里は頷いて答える。言葉に含まれたその意味を理解しているようだ。

椅子から離れ、朱里へと近づく一刀。そして、彼女を抱き上げようと手を伸ばす が。

「いい加減何とかしてくれよつ、ご主人様！！」

飛び込んで来た一人の少女によつて、ピンク色の空氣は儘くも霧散してしまつた。

恋姫に未成年などいません！……一人を除いて。（後書き）

恋姫無双、唯一の未成年者は璃々。この子が参戦する時は、もう／＼（^○^）￥な時。何がとは言わなければ、あ、そういえば四口マの裏表紙で……

翠は瞠若していた。

よくあることだ。加えて顔も赤くなっているが、これもよくあることなので、然したる問題ではない。

翠。北郷軍に属する武将の一人で、名は馬超、字は猛起といつ。翠とは彼女の真名だ。関羽に並ぶ武の持ち主なのだが、彼女と同じくらいに初心でもある。いや、関羽以上かもしれない。

「ななな何してんだよ、ここのHロエロ大魔神！！」

テンパリながらも一刀に非難を浴びせる翠ではあるが、一刀からしてみればなんとも間の悪い登場である。寧ろ、「お前が何してんだ」と言いたくなるぐらいだ。

それは一刀だけに限らず、期待していた朱里も同様だ。「せっかくご主人様と……」と内心強く思っている。

今までなら「はわわっ」となっていたところが、最近の彼女は以前より図太くなつてきているようだ。

「それで、翠はどうしたんだ。随分慌てていたみたいだけど」

「あつ、そうだった」

誤魔化された気もするが、実際それどころではないので深く追及せず、翠は話を進めることにした。

「最近愛紗がおかしいんだよ。兵の調練は遅刻してばっかだし、私と打ち合ってもあつさり負けちゃうしょお」

翠と愛紗、両者の力量は拮抗しているが、どちらかと言えば愛紗の方が翠より上になる。だが今の愛紗は拮抗どころか、まともに打ち合つことすら儘ならないと翠は話した。

「で、今度は愛紗に何言つたんだよ、ご主人様！」

「俺かよつ！？」

バンッと鳴る程強く両手で机を叩き、机越しに一刀へと詰め寄る。拍子に、結つて一つになつた髪が大きく揺れ肩に掛かるが、彼女は

頭を振るだけでそれを背中の方へと流した。

当然、その間も一刀を睨みつけたままだ。

「辺り前だろつ、ご主人様以外誰がいるっていうんだ！」

「まあ確かに、愛紗さんに何かあるとすれば、ご主人様以外には考えられませんし……」

「朱里まで……」

一刀は肩を落とすが、一人の言つことは正に正論である。

いや、待て。考えを変えるんだ。愛紗に何かあれば、それは須らぐ俺が原因。なら、俺が愛紗に与える影響はそれだけ大きい。つまりは愛紗を俺色に染めたということか！

脳内でとんでもない方向に飛躍していく一刀の思考。正直、気持ち悪い。気持ち悪い。

そして考えが顔に出ていたため、それを見た翠と朱里が一、三歩後ろへと下がつていたことも書き加えておく。

「ど、とにかく、何か心当たりとかないんですか？」

「心当たりねえ……」

うーん、と唸り考え込む一刀。

心当たりと言われるが、実際のところ最近一刀は愛紗とあまり顔を合わせていない。先程のように彼自身忙しいため、会おうと思つても中々会えないでいた。

以前は毎日顔を見ていた気がするけれど、そういうえばここ数日は見ていない。けど同じ場所にいるんだ、会おうと思えばいるでも会える。という一刀の考えもあり、結局のところ彼と彼女は会つておらず、心当たりどころか最近の愛紗の様子すらわからない状況にあつた。

「わからないな

伏せていた顔を上げ、翠、そしてその後ろに立つ朱里へと視線を移す。二人とも不安そうな表情をしていた。

「本当に、本当に思い当たることはないのか？」

一刀はまた翠に詰め寄られ、肯じると口を開いた。

その瞬間。

「どうやらお困つのようですな、困った時の趙子龍。」

朝倉＝眉毛 眉毛＝翠 朝倉 翠（後書き）

正直この話の終わりが見えない

誰だ！」につ呼んだの。……ああ、勝手に来ちゃったのか

星は陶酔していた。

またか、と言いたくなるが、そこは星なので仕方がない。星+休み
＝酒 という図式は、最早当然の帰結なのだ。

そんな彼女のことはどうかくとして。

「主、お困りですかな？」

フフフ、と艶やかに体をしならせ、口角を上げ微笑む。目もつりとりとしたように細めている。

酔っ払い。

星を見て一刀がまず思つたことだ。また、朱里、翠も同様だつた。

「ま、まあ困つてるつて言やあ困つてるけど……」

「ならばこの華ちょ ではなかつた、趙子龍にお任せあれ。主の望み、どんなものでも叶えてみせましょ ううぞ」

一刀が全て言い終えるより早く。具体的に言えば、最初の「困つてのところで星は言葉を被せ話し始めた。

「なあ朱里。星のヤツ、いつもより酷く酔つてないか？」

「ええ、そうですね……」

酔っ払いの耳に入らぬよう、互いに小声で話す翠と朱里。聞こえて絡められたら面倒だからだ。

いつもの星ならそんなやり取りでさえ聞こえていただろうが、今はただの酔いどれメンマ女。一人が話をしていたことすら気付いていない。体をゆらりとしながら一刀へと近づき、そのまま体を擦り付けるようにして一刀にもたれ掛かつた。

「お、おいつ、星つ！」

「さあ、主は私に何を望む。夜伽？ 昼の色事？ 朝の処理でも構いません。それともいっそ、全てをお望みですかな？」
もたれ掛かつっていた体は、いつの間にやら一刀の上へと動いていた。

彼の膝に腰掛け、両手を一刀の首の後ろへ回し、胸に胸を押し付け。誘っているとしか思えない行動だ。

「それとも、今、ここで……？」

クスッと鼻を鳴らすように小さく笑い、艶美に微笑む。

見上げる星と、見下ろす一刀。彼の視線は星の目、鼻、口と下り、胸元まで下りている。既に裸を見ているとはいえ、それとはまた違う。自分の胸に当たる柔らかな感触と、潰れて淫靡に歪むそれを観として得る。

と、やおら。口は閉じたまま、舌先だけでゆっくりと上唇を舐め取つていく星。意識してか、無意識か。わからぬがそれは、一刀を、激しく。

ゴクリ。と鳴ったのは、どちらの喉か。

その瞬間。

「おつと」

星はひらりと彼から離れた。

「へ？」と間の抜けた一刀の声。そして。

水のぶつかる音が部屋に響いた。

誰だ！」こいつ呼んだの。……ああ、勝手に来ちゃったのか（後書き）

最早星の存在が18禁。
モザイクかけるモザイク。

一刀は漏水していた。

言葉としておかしなところがあるが、あながち間違つてはいない。とはいいうものの、決して一刀がお漏らしをした訳でも、耳や鼻から変な汁を垂れ流している訳でもない。そんなことがあれば太守として、それどころか人として大問題だ。

して何など言ひ

……なあ翠、いくら何でもこれはないんじゃないのか?」「

濡れて漬れた髪から、顔を伝つて顎からいくつもの雫が流れ落ちる。白銀だった一張羅も水に濡れて灰色にくすんでしまつてゐる。

ないんだろう、こんな時にそんなことしてつ

顔を真っ赤にして、語氣荒く怒鳴る翠。手に持っているのは、空になつた水差しだ。この様子からいつて、翠が水差しの水を一刀にぶち撒けた、ということで間違いないだろう。

翠さんの言ひ通りです！」

ともう一人、非難の声を上げたのは、言うまでもなく朱里である。
誰にも聞こえてはいないが、「私だつてさつき……」と呟いている
ところをみると、若干のやつ当たり、嫉妬も含まれているようだ。
「くも箇の鬼の腰、こいつつうぞ、三

一刀から少し離れた位置で、壁に寄りかかる星。どこか他人事のよう二聞二見るのな、気のせいやうか。

「そんなベタなセリフ……。つていうか星、ずるいぞつ。自分だけ
ちゃつかりと避けて！」

「何を仰られるか。酔つた私が避けられて、素面の主が避けられぬなど、それこそおかしなこと。主も剣を握る者ならば、あれぐらい簡単に避けて貰わなくては戦場でやられてしまいますぞ」

星の言う事ももつともだ。これから先、幾度となく戦場へ出向くことだらけ。その時常に誰かが傍に居てくれるとは限らない。自分で自分の身を守る術を持つていなければ、この群雄割拠の時代、生き残ることなんて出来やしないのだから。

「……ふむ。いやしかし、今のは私も間違いでしたな。主を守ることこそ、私達家臣の務め。主の危機にのうのうとしていては、ただの役立たずの無駄飯ぐらい。あいわかった。主がそこまで仰るのなら、私も人肌脱ごうではありますぬか」

「え？」

まだまともに言い返すことすらしていなかつたのだが、それよりも早く、星の一人芝居のような話は早送りで進められていく。正に捲くし立てるように、だ。

一刀のみならず、その場にいた朱里、翠も呆気に取られ立ち尽くすだけだ。

「では主、行きますぞ」

「ど、どこに？」

「勿論、修練に決まっております」

どこから取り出したのか、己が槍を片手に、もう片方の手には己が主を持ち、外へと出て行つてしまつた。

「……」

「……」

残された二人はあまりの突飛さに固まつていたが、どちらともなく正気に戻り、後を追いかけて行つた。

酔っ払いの行動力は異常（後書き）

この小説、一刀と愛紗が主役のつもりだったのに、いつの間にか星
だ出張つてゐる…
何でだらう

一刀は疲弊していた。

と言つた、満身創痍だ。

打ち身、擦り傷、打撲、等々。一目見てわかる程に怪我だらけだ。
「主、もう終わりか！ そんなことでは、自分の身すらまともに守
れませんぞ！」

地面に膝を付け、息を切らす。腕や体あちこちに傷が出来、血が流
れている。上着に薄つすらと滲む赤色が、その証拠だ。

星に煽られ、再び立ち上がるうと膝を伸ばす。が、既に自分一人の
力で立ち上がれる程の余力は残つておらず、剣を杖にしてやつと立
ち上がれる、といった具合だ。

「お、おい、星のヤツ、やり過ぎじゃないのか？」

「ええ……、あれはいくらなんでも……」

心配そうに見つめる一人。後を追つて来た、翠と朱里だ。朱里に至
つては、齧えた様子も見受けられる。

始めこそ冗談めかして打ち合つていたが、時間が経つにつれて星の
態度が変わっていった。豹変、とまでは言わぬものの、一刀に対し
て厳しくなったのは、見るに明らかだ。

「……クソツ」

朱色に染まつた唾液と一緒にその地面に吐き捨て、再び剣を構える。
たつたの一度も、一度としてこの剣が星に届いたことはない。今更
ながらに、わかり切つていたことだ。

自分と彼女の間に、超えることの出来ない壁が存在することを。
剣に関しては、それなりに自負はある。しかしそれは、あくまでも
現世において。この世界でそんな生ぬるい剣など、通用するはずが
なかつた。

「さあどうした。主の剣は私に一太刀どころか、掠りすらしてませ

んぞ」

「……まだまだこれから」

返す言葉は弱々しくも、力の籠もつた声。

その答えを聞き、星は満足そうにニヤリと笑う。それを見た一刀も、同じく笑つた。

「では、趙子龍。参るー。」

石突を一刀に向け、腰を落とす。そして躊躇つことなく、その鉄の塊を大きく振るつた。

その一合を終えた後、一刀は氣を失つて倒れた。

いやなんど訓練用の武器ややつもあ（後書き）

まだまだ里のターン！

愛紗さんハ話ぶりつス！

愛紗は苦悶していた。

構えた青龍偃月刀を不乱に振り回す。風切り音が鳴り響き、凄まじいまでの迫力だ。

が、うつて変わつてその内心は、激しく乱れていた。自分でもわかつていいのだ。この状況が、決して良いものではない。だが心が、体が、上手く動いてくれない。

今日も訓練で皆に迷惑を掛けた。指揮はまともに出来ぬし、翠にも打ち負けてしまつた。

こんな時、自分の性格が疎ましく思える。これがあの義妹であれば、悩むことなくあつと/or>うまに答えを見つけてみせるだらう。

「愛紗は一人で考え過ぎなのだ」

ふと頭に過ぎる、義妹の声。

「……そうだな」

決めた。ご主人様の所へ行こう。

ここ数日間避け続けていたが、それももう終わりだ。私が愛するのはご主人様、一刀様ただ一人。どこの誰とも知らぬ者に心を乱されていは、いざという時に一刀様を守ることなど出来やしない。

「ハアアアアアアアアアア！」

今までの迷いを断ち切るかのように、声と共に青龍偃月刀を縦に振り下ろした。地面擦れ擦れで止められたそれ。数秒の残心の後、ゆっくりとその大刀を両手で持ち直す。

張つていた気を解き、大きく深呼吸。

その場を離れ、一刀の部屋へ向かおうと歩みを進める。

一度行こうと決めると、ついつい心が競つてしまふ。つこひつきまで部屋の前に行くことすら躊躇つっていたのに、今は逆に早く行きたくて、一刀に会いたくて仕方がない。

愛紗本人は気付いてないだろうが、その表情は緩み、頬が紅潮している。彼女はそれほどまでに嬉しく、一刀が愛おしいのだ。

自然と足早になり、気が付けばもう中庭付近。この変わりように、思わず自分で自分を笑ってしまう。

立ち止まり、階段の途中で一人笑っていると。

「ご、ご主人様！」

中庭から聞こえた声目掛け、愛紗は駆け出した。

愛紗さんハ話ぶりっス！（後書き）

ようやく愛紗登場！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7076f/>

こいひめ十ものがたり

2010年10月14日13時59分発行